光

written by ツムギ

切り裂くような銃声が鼓膜を揺らす。それはほんの、一瞬の出来事だった。指先ほどの大きさの鉛玉が十四松の腹を貫く光景が、スローモーションで何度も何度も繰り返し、一松の脳裏に蘇る。それなりに時間が経っている筈なのに、いっそ生々しいくらいにはっきりと、その時の記憶を思い返すことが出来た。…或いは、こびりついてしまったと、そう表現した方が正しいのかも知れない。錆びた鉄に似た血のにおいも、張り詰めた空気の感覚も―狂ったように十四松の名前を叫んでいた、自分の声も。

実際、あの時の一松は、殆ど正気を失っていた。正直なところ自分ではよく覚えていなかったから、兄弟達からの伝聞で知ったことだったのだけれど…それはもう、ひどい取り乱しようだったらしい。

『あの時の一松兄さん、十四松兄さんに万が一のことがあったら、その場で舌を噛み切るんじゃないかあ思うたで』

十四松が負った傷が命に別状のないものだと分かった後、苦笑いと共に末弟のトド松から投げられた言葉である。その際に一松が、曖昧な笑みを浮かべながら誤魔化しこそしたものの、はっきり否定しなかったのは―トド松の指摘が、限りなく真実に近かったからだ。もしも…もしも本当に、十四松が命を落としていたとしたら。きっと自分は何の躊躇いもなく、その後を追っていただろう。ひとかけらの葛藤も逡巡もなく、ごく自然に導き出された答えに、一松は自嘲めいた笑みを浮かべた。

「…ほんに、松能組の若頭秘書が、聞いて呆れるわ」

赤塚で一大勢力となった松能組と、それを支える六つ子の兄弟。以前に比べれば不安定さは格段になくなりはしたものの、平穏とは言い難い日常の中で、生きているのだという自覚はある。沢山のものを奪ってきたし、沢山のものを壊してきた。他人を殺めることにだって、誰かの死に直面することだって、もうすっかり慣れてしまった…ただ一人の、例外を除いては。

十四松に対して、そういう、ある種の歪んだ執着を抱くようになってしまったのは、一体何時の頃だっただろう。もう一松には、そのきっかけが何だったのか、はっきりとは思い出せない。ただ、この世界に本格的に足を踏み入れることを決意した時には、既にしっかりと自覚していたから、相当の年季が入っていることは確かだ…拗れてしまっていると、そう表現してしまっても過言ではない。そもそも、失うことが何よりも怖いのなら、どんな手を使ってでも、この血生臭い世界から十四松を遠ざければよかったのだ。その選択をしていない時点で、ひどい矛盾が生じている―そしてその事実から、全力で目を逸らしている。存在しているのはただ、愚かしいエゴイズムでしかないのだと、一松自身も、分かっては

いたけれど。
「俺はクズじゃ…心底嫌になるくらい、最低最悪のドクズ野郎じゃ」
「一松兄さんは、クズじゃあないで。クズじゃのうて、優しいだけじゃ」
　照明を落としているせいで薄暗く、静寂に包み込まれた一松の私室。懺悔のように吐き捨てた言葉は、しかし柔らかな声音に、丁寧に掬い上げられた。のろのろと顔を上向けてみれば、微笑む十四松と視線が絡む。ソファに座っている一松の正面に十四松は立っていたから、ちょうど見下ろされるような形だ…ともすればそれは、深い底に沈み込もうとしていた一松を、十四松が迎えにきたような光景にも見える。本来ならば一松が、十四松を迎えに行かなければならない筈だったのに、すっかり立場が逆転してしまっているのが、何だか妙に滑稽だった。
　命に別状はなかったとはいえ、長い間病院で、治療と回復に時間をあてていた十四松。その間に見舞いどころか、退院後の迎えまで他の兄弟に頼んだのは、情けない自分を直視することが嫌だったからだ。もういい加減、愛想を尽かされても仕方がないとも思うのだけれど―勿論、そんなことになろうものなら間違いなく自害コース一直線だと、重々自覚した上で―しかし十四松は決して、笑みを崩しはしなかった。伸ばされた掌が、ゆっくりと一松の頬に触れる。直に感じた体温に、大袈裟に肩が跳ねてしまった。
「僕は生きとる。…ちゃあんと、生きとるけぇ」
「…じゃが…」
「…一松兄さんは、優しいのう」
　普段の、元気溌溂とした姿ではなく―敵対する相手に、容赦なくドスを振るう姿でもない。その表情がたった一人にだけ向けられるものだということを、一松はもう既に、痛いくらいに知っている。どうして、なんて―今更すぎるそんな問いかけは、あまりにもナンセンスだ。十四松に気付かれないよう、一松はそっと唇を噛む。腹の底から込み上げてくる感情に、泣いてしまいそうだった。
「ちゃんと病院、来てくれよったことも分かっとるよ。…顔見せてくれんかったのは、ちいと寂しかったけど」
「それは…その、すまんかった」
「ん…ほんならお詫びの印に、ちゃんと可愛がってくれれば許しちゃるけぇ」
　そう言った十四松の腕が、とうとうゆっくりと、一松の首へと回った。そのままぎゅう、と抱き着かれてしまえば、建前や言い訳は、何の意味も持たなくなる。臆病で、自分勝手で、どうしようもなくて―それでも、手を伸ばしていいのだろうか？脳裏に浮かんだ疑問の答えは分からないまま、しか

し一松の腕は、勝手に動いて十四松の胴へと強く巻き付いていた。同時に胸へと押し付けた耳が、とくりとくりとリズムを刻む、心臓の音を聞く。ああ、本当に十四松は生きているのだ…それを実感して漸く、一松の体から、こわばりが解けだした。

「…のう、十四松。触っても、ええか」

「もう、とっくに触っとるよ？」

「そうじゃのうて…抱きたい、の意味じゃ」

「それじゃって、さっきからずっと、ええって言っとる」

ちゃあんと、全部、確かめて—まるで子供に言い聞かせるような十四松の口調は、きっとわざとなのだろう。気を遣わせてしまっていることに、一松の口からは、思わず苦笑いが零れ落ちたけれど…今日だけはその優しさに、甘えさせてもらうことにして。ソファから立ち上がった反動で、十四松と共に、傍らのベッドの上へと沈み込む。皺ひとつない真っ白なシーツは、ひんやりと冷たかった。

一松が初めて十四松と体を重ねたのは、二人が高校を卒業してすぐのことだった。まだこの世界に足を踏み入れることを決めたばかりの頃、肩や背中に、何も背負っていなかった時の話だ。傷ひとつなく綺麗だった十四松の肩、そのきめ細やかで滑らかな肌の感触を、一松は、今でも鮮明に覚えている。まだ『何にでもなれた』当時の可能性のことを考えれば、喉の奥から苦い味がこみ上げてきたけれど…今、そこに宿っている狼も、同じようにいとおしい。当たり前だ、何がどうなろうとも、十四松が十四松であることに、何ら変わりはないのだから。

「ふ…は、十四松っ…」

「ぁ…一松にいさっ…」

一度唇を触れ合わせてしまえば、箍はいとも簡単に壊れてしまった。縺れるように服を脱がせ合いながら、指を伸ばして、舌を這わせる。まるで空白を埋めているようだと、熱に浮かされ茹りだした頭の中で、ぼんやりと一松は考えた。実際、触れればどれだけ飢えていたのか、嫌でも思い知らされてしまう…至近距離で見つめる十四松の潤んだ瞳に、暫く忘れていた筈の情欲は、いとも容易く煽られた。無意識のうちに唾をごくりと飲み込んだ音が、どうやら聞こえてしまったらしい。ふ、と笑みを零した十四松に、一松は気まずくなって顔を逸らした。

「…気持ちええな、十四松」

「うん、すごい、気持ちええ」

広いベッドの上で、これ以上なくくっつき合う。早く全てを暴ききってしまいたい欲望と、時間をかけて慈しみたい欲求が拮抗した末に、結局一松は後者を選んだ。汗でしっとりと湿った肌は、お互いの体をひとつに馴染ませていく。一糸纏わぬ後になった十四松の腹を改めて確認すれば、ケロイド状に引き攣れた傷跡が、しっかりと残っていた。もう完全に塞がってはいたけれど、きっと一生残ってしまうものなのだろう―そう思えば妙に感傷的な気持ちになって、一松は指先で、少しだけ色が濃くなっているそこへと触れる。すると十四松の肩が、予想していたものよりも随分とはっきりした動きで、ぴくりと小さく跳ね上がった。

「ん、すまん、痛かったか？」

「い、いや…痛かった、訳じゃのうて…」

「…え、じゃあ何…」

「えっと…その……気持ち、えがったから」

「……は、」

「じゃ、じゃけえ、もう、こういうの久々じゃけ！色々敏感になっとるんじゃって！」

てっきり痛かったのかと思い一松は慌てたのだけれど、どうやらそうではなかったらしい。しどろもどろで言い訳をする十四松の顔は真っ赤で、此処まであからさまに恥じらう姿は、一松から見ても珍しかった。確かに出来たばかりの傷跡だ、何もない部分よりも接触に過敏になってしまうのも分かるのだけれど…おそらく、それだけが理由ではない。一度そう理解してしまえば、一松がするべきことは、もう既にこれ以上なく明白だった。

「―っ、あ！にいさ、急に、何っ…」

「久々で焦れてたんじゃろう？望み通り、いらっちゃる」

「そ、じゃけど…ひぁ、あっ」

一松が前触れなく指先を下肢へと伸ばせば、十四松の背中がしなるように動いた。既に反応を示し、熱を溜め込んでいた性器は、先端を先走りで濡らしている。そこに触れると、粘ついた水音と、十四松の艶を増した甘い声が、一松の鼓膜を震わせた。やわく握り込んで上下に擦るだけでも、敏感さを増した体には、過ぎた快感になってしまっているらしい。顔を真っ赤にして首を振る十四松の額へと、一松はなだめるように唇を落とした。

「あ、いちまつにいさ、僕、もっ…！」

「ん―イってええよ、十四松」

「んぅ、ひぁ、あ、あああっ…！」

先端を押し潰すように刺激すれば、十四松は呆気なくのぼりつめてしまった。悲鳴のような嬌声と共に、びくびくと跳ねる体。性器から零れ落ちる白く濁った精液が、ぱたぱたと腹を汚していく。一松が自分の掌に付着していた一滴を舐め

ると、青臭さと、ほんのりとした生温さを感じた。それはこれ以上ないくらいに生々しくて、何よりも鮮明な命の証だった。心音を聞いた時よりもはっきりと—十四松の生を、実感する。勿論、端から見ればひどく滑稽で…ともすれば、狂気じみてさえいると、自覚はしていたけれど。

「ふっ…ぁ、」

「そのまま、力抜いときんさい」

くたりと脱力した十四松の脚を開き、一松は最奥へと指を伸ばす。随分と久しぶりに触れたその場所は、潤滑油を纏った指でも、固く閉ざされてしまっていた。一刻も早く繋がりたいという欲求は確かにあったけれど、傷付けるのは本意ではなかったから、一松は慎重に、十四松の中を探る。もう何度も繰り返している行為だったけれど、この瞬間は何時だって、独特の緊張感を孕んでいた。

十四松も、久々に受け入れる異物に、快感よりも違和感を拾っているらしい。零れる吐息には隠しきれていない苦しさが混ざっていて、それでも意識的に力を抜こうとしている様が、どうしようもなくいとおしかった。十四松に焦がれてしまう理由は、こういうところにもあるのだろうと、一松は思う。確かに許されているのだという確信—それはそのまま一松の、生きる理由になるのだから。

「あ、いちまつに、さ—もっ…ええけ…っ」

「—ああ、俺も、流石にもう、限界じゃ…」

指が三本、スムーズに動くようになったところで、十四松が涙混じりにそう言いながら、一松の手を引っ掻いた。まるで懇願するかのような声音と表情に、これ以上はないだろうと思っていた筈の情欲が、また呆気なく煽られる。本当にどうしようもないなと思いながら—一松は粘ついた液体に塗れて熱にふやけた指先を引き抜き、十四松の両の太腿へとかけた。丁寧な愛撫によって十分綻んだそこに、痛い程勃起した性器を宛がう。ぐ、と体重をかければ、あっという間に、飲み込まれていく。

「ぅあ、あああっ…!」

「ぐ…あっつ…!」

敏感な粘膜へとダイレクトに伝わる熱は、指で触れた時の比ではなかった。すぐに堪えきれなくなって、一松は十四松の腰を強く掴み、律動を開始する。熱と快感に浸りきった思考回路は、ろくに機能などしない。最早まともに言葉も紡げなくなっているらしい十四松の両目からは、ぼろぼろと涙が零れ落ちていた。過ぎた快感は限りなく暴力に近いのだということだって、確かに、分かってはいたのだけれど。それでも一松には、十四松が仰け反らせた白い喉に、噛みつくことしか出来なかった。

これ以上ないくらいに十四松と近付いて、ともすれば共に

溶け落ちてしまいそうなくらいなのに、一松の心に存在する焦燥感は、結局消えないままだった。それが一生続くのだろうということも、頭の何処かで理解している…両腕に刻まれた、狐と狼と同じように。それが十四松の隣にいるために必要な戒めであるのならば、一松はただ、甘んじて受け入れるだけだ。生への希求―何時だってどうしようもなく、焦がれ続けてしまうもの。例えるのならばそれは、暗闇の中で彷徨いながら、必死になって光を求める行為に似ていた。

「…いちまつ、にいさん…？」

「…っ、ええけぇ、暫く黙っとれ…」

二人同時に上り詰め、あらん限りの欲望を吐き出して。少しずつ熱が引き始めた空気の中、先に異変に気付いたのは、十四松の方だった。何もかもを曖昧にぼやけさせていく、水の膜に覆われた視界。あまりにも情けなかったから、一松は十四松の肩口に自分の顔を押し付けたけれど、体が震えていたから、きっと何の意味もない。それでも、十四松が黙ったまま、そっと一松の肩を撫でてくれたから―一松の頬は、熱い雫で濡れていくばかりだった。

熱く大きな塊に邪魔されている喉の奥、掠れてしまった声でどうにか絞り出した『愛している』という言葉は、果たして十四松に、届いてはくれたのだろうか。残念ながら一松には分からないままだったけれど、ほんの僅かでも、伝われば いいと願った。つい先程までこれ以上なくひとつだった、二人分の心臓の音が、鼓膜を震わせ溶けていく。仄暗いままの世界は、それでも確かに、輝いていた。

了

596114アンソロジー
P.199～203
訂正版